

証言も名前も残っていない、外国人強制労働者用売春棟で働かされた女性たち

池永記代美 (ベルリン・女の会)

いくつかの穴が切り抜かれたブラウスは、着ていた女性もはや存在しないことを暗示しています。粉々に割れた花瓶の



なぜ何も残っていないのか？を問い、洋服など具体的なものを使い、見えない人、歴史から消された人を想起しようと試みるスツェパンスキーさんの作品。©Frank Peters

周りに散らばった花やテーブルクロスは、そこで起きた暴力を想像させます——。1年以上前のことですが、2024年11月から半年間、想起文化をテーマにする芸術家ビルギット・スツェパンスキーさんの個展『MISSING FEMALE STORIES (行方不明の女性たちの物語)』が、ベルリンの「ナチ強制労働ドキュメントセンター」(以下、センター)で開かれました。展示の主題は、外国人強制労働者のための売春棟で働かされた女性たちでした。

ドイツ人の“血を守る”ために設置された売春棟

1939年の第二次世界大戦開戦後、男たちが前線に送られ労働力不足が深刻化したナチ・ドイツは、占領した国々で労働者の募集を始めます。最初は志願ベースでしたが、労働条件が過酷なことが知れ渡るにつれ応募者は激減、強制力が行使されるようになりました。ナチスはスラブ人を「価値の低い人種」とみなしたため、ポーランドなどでは凄まじい人狩りが行われました。外国人強制労働者が、軍需産業を始めとする製造業や鉱業、土木・建設業だけでなく、農業、自治体、教会、一般世帯などにも投入されたことは、現在のドイツ社会でも十分認識されていません。センターによると、ナチ・ドイツが国内に動員した外国人強制労働者は、1944年にはドイツ全労働力の4分の1を占め、1945年の終戦までにその数は1300万人に上ったそうです。ナチの人種主義を反映して、ポーランドやソ連からの労働者には外出の自由はなく、週給5ライヒスマルク (RM) の低賃金で60～80時間の労働が課されました。他方、フランスやオランダなど西側占領国からの労働者の週給は44RMで、外出やスポーツの自由も認められていました。

ドイツ人を最高の人種とし、純粋なドイツ人国家の形成を目指したナチ・ドイツは、外国人労働者の動員で、ドイツ人の“血が穢される”ことを恐れしました。そこで1939年11月、「ドイツ国民の防衛力擁護のための刑罰規定を補足する政令」で、外国人労働者とドイツ人の性交を禁止しました。性交自体を禁じたのではなく、1940年12月には、外国人労働者の性のはけ口

として、「可能な限り、彼らが多数配置されているすべての場所に、専用の売春宿を設置する」という極秘の布告が出されました。ドイツ語で売春宿を意味するBordellの頭文字を用いて「B棟」と呼ばれた売春棟の設置は強制労働者を使用する企業、地方自治体、もしくはナチ党労働組合が行い、組合内に設立される会社がそれを管理することになりました。

歴史から消された女性たちを可視化したい

売春棟に通えたのは、西側占領国からの労働者のみでした。棟で働くのは、訪れる男たちと同国籍の「売春婦」か、シンチ・ロマ族の女性が望ましいとされましたが、ドイツでの強制労働を拒んだ女性がポーランドから売春棟に送られた事例が明らかになっています。

外国人強制労働者のための売春棟に関する個別研究は乏しいのですが、ナチ時代の性売買制度や強制労働に関する論文の幾つかがそれに言及しています。その一つによると、1938年にドイツに併合されたオーストリアのザルツブルクでは、売春棟への入場料は5RM、女性たちは1日10RMの賃料を管理会社に支払っていたそうです。女性たちは定期的に医師の診察を受けましたが、それは貴重な労働力である男たちの性病感染を防ぐためでした。たとえ自由意志で売春棟に来た女性がいたとしても、その性は、ドイツ人女性を守るための“防波堤”として、そしてナチによる強制労働という経済テロを維持するための道具として利用されたのです。

管轄の不明瞭さや土地や資金確保が困難だったため、ナチの期待に反して売春棟は60棟しか設置されず、そこで働かされた女性は約2500人と見積もられています。しかし、彼女たちの名前や証言は、どこにも、全く残されてい

ません。確かに存在したのに歴史から消されてしまった女性たちを可視化したい——それが、スツェパンスキーさんがこの主題に取り組んだ動機でした。彼女の個展をきっかけに、2024年12月、センター近くにあった売春棟跡地に説明板を設置するという決議を地元区議会が採択しました。その後ある男性郷土史家が、棟で働いていたのは「自由意志」で志願したフランス人女性で説明板は不要だと抗議したため、スツェパンスキーさんはセンターと共に、説明板設置を目指して歴史学者などと調査を進めていく意向です。



スツェパンスキーさんが建築文書アーカイブで発見した、センター近くにあったB棟の設計図。待合室や医務室を備え、一辺3.75mの正方形の部屋が12室ある。「ケーニヒスハイデのB棟」設計図(1943) ©トレプトウ＝ケーベニツ建築文書アーカイブ



B棟の跡地を訪ねるスツェパンスキーさんのガイドツアー。帯を広げて一辺3.75mの部屋の大きさを再現するのは、彼女の作品でもある。(2025年4月6日、筆者撮影)